

ブック村だより

本学コレクション紹介 (22)

J.S.ミル『自伝』	森岡 邦泰(1)
本との出会い、自分との出会い	数家 鉄治(2)
ぶっくす・なう	(4)
『ダーウィン以来—進化論への招待—』	谷岡 一郎
『昔も今も』	塩田 眞典
『バブル獄中記』	佐和 良作
『Mac Fan』2011年11月号	下山 晃
学生選書スタッフに訊く おすすめの一冊	(6)
データベース活用講座②	(7)
インフォメーション・開館案内	(8)



〔Facsimile of page 26 of Original Manuscript〕
 (『Autography of John Stuart Mill』(コロンビア大学,1924年)所収)

本学コレクション紹介 (22) J.S.ミル『自伝』1873 ②

ミルが受けた英才教育で興味深いのは、ギリシャ語の予習をする際、当時英語引きの辞典がまだなかったため、知らない単語はすべて父に尋ねたといっていることである。これは意図しなかったかもしれないが、結果的に外国語学習法としては一番の近道を通ったと言えよう。外国語学習初期において一番の障害は、語彙力の不足である。単語は辞書を引けば一応分かるはずだが、知らない単語が全体の7、8割もあったら、そのすべてを引くのは大変な労力だし、おまけに単語は複数の

語義があるから、そのすべての組み合わせを作ったら、何十、何百になってしまい、ほとんど暗号解読だ。辞書を用いて読解が実用的に可能なのは、知らない単語が全体のせいぜい2、3割程度しかない場合である。学習初期には単語の意味は、最初から与えることが望ましい。ミル父はまさにそれをやった。シュリーマンも『古代への情熱』で、外国学習に対訳を使い、辞書を引くための時間をまったく無駄にしなかったといっているが、ミルも図らずも同じように学習したと言えよう。

(経済学部 准教授 森岡 邦泰)

特集 本との出会い、自分との出会い 『読書の楽しみ』

経営学科 教授 数家 鉄治

小学校のころは読書をする習慣をもたず、小説を含めて本を読むことはきわめて少なく、中学生のころでもそうで、それで作文に困った思い出がある。その後、黒岩重吾、司馬遼太郎などの小説をよく読むようになったが、内外の古典を読むことは少なかった。それが大学生のころには、むしろ本を乱読するような形で、多くの本を買い、図書館の本も多量に読むようになった。歴史書はよく読んだし、経済関係の本も多量に読んだ。と言っても、ちゃんとした専門書をじっくりと読んだわけではなく、読みやすい本を気楽に読んだことになる。

司馬遼太郎の小説は特に面白かったし、私の蔵書の中心をなしていた。今でも、『街道をゆく』シリーズの全32巻を複数そろえていて、繰り返し読んでいる。その他、古本屋等で領域を問わず気に入った本を買い続けているが、仕事の専門書を読むことを中心として生活しているので、買うだけで本は積まれていることも多い。定年になったら読もうと思って買っているが、はたしてどうなるか。単なる本マニアかもしれない。

こうして生徒・学生のころを思い出してみると、本好きではなかったし、本を読む習慣が身についたのはもっとあとになる。その契機になるのは、おそらくマンガであったかもしれない。マンガは何回も読む気はしないけれども、本は何回読んでも味わいのあることに気づくのである。また良くわからないのに、阿部次郎の『三太郎の日記』は何回も読んだ。

私は、大阪市南区の商店街の商人の家で育ったので、アカデミックな雰囲気とは異なる世界の行動様式を身につけていて、勉学を強制されることは全くなかった。本を読むことも自分のペースで身につけたのであって、(受験に)役立つよりも、おもしろいが基準であった。おもしろおかしく読み、そうでない本は途中で読むのをやめてしまうので、一冊を読み終えることを目的としない読み方である。

さすがに専門書は丹念に読むが、これは仕事上のことであって、娯楽として購入した本は今でもそのようなスタイルをとっている。しかし、なかには何回も読む本があり、そのような本を発掘するために多くの本を購入してきたのかも知れない。質素、儉約を心がけてきたが、本には金を惜しまずに購入し続けてきたので、家中が本だらけになっている。

しかし、一冊の本でも何十回も読める本があれば幸せであろうし、少なくとも何回も読める本が何冊かあれば、人生に潤いを与えてくれる。そのような本を見出したいものである。

ここで少し専門領域のことをのべてみよう。と言っても専門書を解説するわけではない。本箱には黒岩重吾の小説もたくさんあるのは、ある時期に集中的に読んだのであるが、男女の描写には学ぶところが多く、考えてみると私のジェンダー研究の出発点になっているのかもしれない。そして組織と人間の関係において、不条理、不合理も発生して、それが現実的なコンフリクトであるが、

そのことが巧みに描写されている。

組織論では組織は論理的、合理的な体系として論じられているが、やはり人間の協働のシステムとして、生身の人間にはコンフリクトも発生しやすい。労働者を生産手段としてコストとして考えると、なるべく賃金を抑えることになり、生活する労働者とは対立する。労働者を人的資本・人的資源と考えれば、人材にも投資して人材の育成に力を入れようが、その逆も多い。企業小説にはそのやるせない矛盾、対立を巧みに興味ぶかく描かれていて、企業小説も数多く読んだ。経営者の伝記や『私の履歴書』もよく読んだが、そこには提携交渉、合併交渉などのことが書かれていて、信頼関係、心のつながり、事前の準備の重要性などが書かれている。研究のために会社に聞きに行っても、こうしたことは教えてくれないし、企業にとって都合の悪い事は、隠されている。しかし失

敗から学ぶ姿勢はとくに大切であって、宣伝広告になる成功の事例はいくらでも入手できるのとは対照的である。

こうしてみると本には文化の香りがあるのみならず、実践的な知識も入手できる。教養と実学の両方にわたって本をつうじて学ぶことができる。

広範囲の領域の本を乱読してきたが、それは今日のような非連続的変化の時代への対応に役立っている。自分では多くの本を読んできたつもりでも、人生の晩年になっても、本当はわずかししか読んでいないことに気づく。定年になったら読みたい本をかなり買い込んだが、本だけはどんな場所でも自由に読めるので、それを今から楽しみにしている。

みなさんも、「おもしろおかしく、へこたれず」で、読書を実践してください。



『司馬遼太郎の風景』(全11巻)
(NHK「街道をゆく」
プロジェクト著,1997-)他
【配架場所】 4F 915.6/Sh15



『街道をゆく』新装版(全43巻)
(朝日新聞出版, 2008-)
【配架場所】 4F 915.6/Sh15



『私の履歴書』
(日本経済新聞社編,1957-)
【配架場所】
日経ビジネス人文庫 ほか

『ダーウィン以来 —進化論への招待—』

(早川書房／ハヤカワ文庫, 1995.9)
スティーヴン・J・グールド 著
浦本 昌紀・寺田 鴻 訳

科学エッセーといえばアイザック・アシモフの科学エッセー・シリーズが有名だが、並び称されるのがグールド。中でも入門書は最近文庫化された本書。生物学における目からウロコのエッセーが満載で、文体も格調高く読みやすい。特に上巻第三部と第四部は、これまで知らなかった世界に驚かされるだろう。

2002年に61歳という若さで世界したグールド。彼の最後のエッセー集も、今年早川書房から出版された。『ぼくは上陸している—進化をめぐる旅の始まりの終わり— (上・下)』と題された本書によって、グールドは25年間、のべ300本にのぼるエッセーの締め括りと決めていた。おそらく死

期を悟り、キリの良いところで筆を置く決心をしたのだろう。最後の表題の上陸云々は、ハンガリーから移民してきたグールドの祖父たちが、アメリカに着いた日の想い出を綴ったものだが、奇しくもそれはテロ事件のちょうど100年前、1901年9月11日のことだった。

もし本書でグールドのエッセー集のファンになった人がいるなら、おススメは『ワンダフルライフ—バージェス頁岩と生物進化の物語—』と『フルハウス—生命の全容—四割打者の絶滅と進化の逆説—』。この両書を読了することができ、興奮を感じることでできる人は、知的な人間だと思う (お友だちになりましょう)。

(学長 谷岡 一郎)



『昔も今も』

(ちくま文庫, 2011.6)
サマセット・モーム 著 天野 隆司 訳

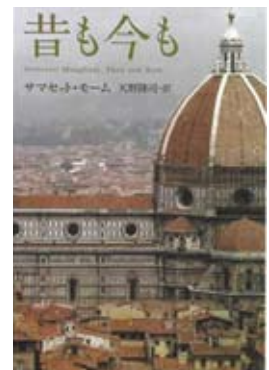
一時盛んに読まれたにもかかわらず忘れ去られてしまったサマセット・モームの小説群が近頃再び書店の棚に並びだした。これはその中の一冊、モームには珍しい歴史小説である。時代は16世紀初頭、所は戦乱に明け暮れるイタリア、主人公はマキアヴェリズムで知られるニッコロ・マキアヴェリだ。

物語の骨子は、ローマ教皇軍を率いるチェーザレ・ボルジアに対処すべく劣勢に立つフィレンツェ共和国から派遣された外交官マキアヴェリの駆け引きからなる。当地でのマキアヴェリのお仕事は、凶暴で知略に長けたチェーザレ相手にのりくりと時間稼ぎをすることなのである。これが主旋律でありこの話だけでもスリリングなのだが、小説の魅力はそこにもう一つの対旋律が微妙

に絡み付くところにある。実はこの主人公、難しい外交交渉の裏で年若く美しい人妻に横恋慕し、邪魔な亭主を追っ払い事を遂げようと、何と私生活でもマキアヴェリズムを実践しだすではないか。これが対旋律。結末は哄笑ものだが読んでのお楽しみ。

ここには善人はほとんど登場しない。腹に一物抱いた連中が互いに相手の腹を探り合いつつ蠢く、といった感なのである。本書は意地悪おじさんモームの痛快悪漢小説であり、善人ばかり出てくるテレビのホームドラマにうんざりされた方にお勧めの一冊、住むならホームドラマだろうが、読むならこちら。

(経済学部 教授 塩田 真典)



『バブル獄中記』

(幻冬舎, 2011. 8)
長田 庄一 著

古来、バブルが崩壊した後、数多くの犯罪者が逮捕され、刑につくといわれてきた。1980年代後半に膨らみ、90～91年に崩壊した、わが国のバブルでも数多くの犯罪者が司直の手にゆだねられた。筆者はそのうちの一人である。

筆者は、戦後一代で第二地銀トップの東京相和銀行を育て上げ、金融業界では無学無一文から成り上がったということで、有名な経営者であった。東相銀は99年6月に破たんしたが、破たんから1年ほどたった2000年5月筆者をはじめとした経営陣は、「見せかけの増資」の疑いで逮捕された。

本書は無罪を訴え続けた筆者が、110日間にわたる拘置所生活と検察による取り調べ、自らの波

乱の人生を獄中でつづった手記である。筆者は昨年亡くなったが没後1年たったのを契機に、手記が刊行された。

娘くらいの年齢の女性検事に怒鳴られながらも理性を保ち、無罪を主張し続けた。おそらく常人ではここまでしぶとく抵抗できまいと思いつつ興味深く読むことができた。

また、合間に文芸評論家の江藤淳、フランスのシラク元大統領、森喜朗元首相ら著名人との思い出も書かれており、筆者の多彩さを知って正直驚いた。これまで筆者のことを金の亡者としか思っていなかったが、とんでもないことで大変な文化人でもあることを知った。文章も平易で一気读完することができる。

(経済学部 教授 佐和 良作)



『Mac Fan』 2011年11月号

(マイナビ (旧毎日コミュニケーションズ),
2011.11)

この号の表紙でまず目につくのは、柔らかな書体で書かれた「ありがとう、スティブ」のカラフルな伝言。あえて「伝言」と書いておく。

アップル社の創業者スティブ・ジョブズがCEOを退任したことを受けての特集記事が載っている。この号が書店に並んでから数日後、ジョブズはすでに天国へと旅立った。世界の人々に楽しくて便利な幾つもの未来をくれた人である。

世間では何となく、「iPhone買おうかな、マックにしようかな」という声もぼちぼち聞こえはじめている。「マック伝教大師」を名のってきたほくに言わせると、「iPhoneにしようか、アンドロイドにしようか」とか「Macにしようか、Windowsにしようか」というのは、実のところ「ライブコンサートに行かない、それとも軍隊に入ろかな」というのに等しい。

あ、ちょっと問題発言、かな？

それはともかく、この号、「わかる人にはわかる」といった離島的な魅力の類かも知れないけど、今の時代、今後の時代を考えるにも

リーダー像をさぐるにも、色々なヒントをさずけてくれる内容。ジョブズの間味も判る。世の大学生諸君はすべからく、「毎日1分! 英字新聞」や「英語で言えた!」のサイトを毎日チェックし、小出裕章、武田邦彦、フェアウインズ・アソシエイツなどの警告に毎週耳を傾け、毎月この『Mac Fan』誌とかそのほかのPC雑誌に目を通してみたら、世の中、ずいぶん変わると思うんだけど…。どう、かな？

(総合経営学部 教授 下山 晃)



学生選書スタッフに訊く おすすめの一冊

現在、当館の学生選書スタッフ登録者数は23名となりました。選ばれた図書は「学生選書コーナー」に配置しており、特設コーナーに次ぐ人気（貸出率が高い）コーナーとなっています。今回は、先日実施した読書会で推薦された図書から何冊かをご紹介します。

『武器としての決断思考』

瀧本哲史著 講談社 (2011.9)

日常生活は決断の瞬間であふれている。進学・就職など大きな決断の時はノリでは決められない。メリット・デメリットについて論理的に判断する必要がある。この本は、そういった大きな決断を行なうときの考え方について書かれている。

廣野秀一（経営学科3年）

『僕は君たちに武器を配りたい』

瀧本哲史著 講談社 (2011.9)

『武器としての決断思考』シリーズ第2弾。既存の既得権、政権と闘うための生き方と考え方。「勝利の方程式」が変化していくなか、自分に合う選択肢を探すには？

藤原裕也（経営学科2年）

『経済のことがよくわからないまま社会人になってしまった人へ（増補改訂版）』

池上彰著 海竜社 (2009.12)

経済の初歩的知識が、「絶対わかる」レベルで書かれている。この本に書かれている「当たり前のこと」を知らないのは致命的だと思って読んでほしい。

市原岬（経済学科3年）

『怖い絵 2』

中野京子著 朝日出版社 (2009.6)

有名な絵、なにげなく見ている絵の時代背景について知る事ができる。2巻はだまし絵で有名なエッシャーやドガなど、メジャーな作品が掲載されているので入門編としておすすめ。

堤真緒（経営学科4年）

『なぜアップルの時価総額はソニーの8倍になったのか？』

長谷川正人著 東洋経済新報社 (2011.3)

色々な会社を財務部分のさまざまな視点から比較。「8倍」の差が開いたのは、ここ数年での話というところに驚いた。数字だと、客観的に見る事ができるのは面白い。

濱中拓郎（公共経営学科3年）

『その数字が戦略を決める』

イアン・エアーズ著 文藝春秋 (2007.11)

例えばGoogle検索の際に表示される、「もしかして」には5ベタバイトのデータをもとにした協調フィルタリングシステムが応用されている。

この技術は教育、医療など幅広く用いられており、2011年現在、どう発展しているのを知りたいところ。

阿部竜作（経済学科4年）

『ランナー』

あさのあつこ著 朝日出版社 (2009.6)

本好きの友人を通してこの本と出会った。主人公とともに描かれる風景描写が美しく、読んでると本の中にいるような気持ちになれ、私の読書体験における「成功体験」となった。

吹上文音（経営学科2年）

『脳を使うのがうまい人、へたな人』

石浦章一著 大和書房 (2011.7)

著者は分子細胞生物学者。

「頭の良さは生まれか育ちか？」「脳にはなぜ男女差がないのか？」といった「脳の話」がニューロン・シナプスレベルまで掘り下げられ、しかしわかりやすく解説されている。興味があれば是非読んでほしい。

杉山祐脩（経営学科4年）



選書スタッフ募集中です！お問い合わせはカウンターまで！

データベース活用講座②

「日経ビジネス」「日経パソコン」といった「日経」から始まるタイトルを、書店や広告で目にされた方は多いのではないのでしょうか。今回は、これら日経BP社発行の雑誌記事約40誌がまとめて検索できる「日経BP記事検索サービス」について、いくつかの活用方法をご紹介します。※今回「日経テレコン21」のご紹介を予定していましたが、本データベースへの質問が複数寄せられましたため、掲載予定を変更しています。

入り口：「大阪商業大学図書館」ホームページ
<http://www.lib.daishodai.ac.jp/> (学内のみ)



トップページ「本学資料検索(①)」より「契約データベース(②)」をクリックすると、データベース一覧(用途別)が表示されます。



◎国内の雑誌・論文記事を探すの項にバナー(③)が表示されますので、クリックして下さい。

「日経BP記事検索サービス」トップページ



◎サービスの概要

・雑誌記事検索・本文閲覧

- ・日経BP社が発行する約40誌を横断検索できます。
- ・キーワード・会社名・表紙から検索できます。
- ・形式はテキストまたはPDFファイルの2種類から選択できます。
- ・表紙検索が可能です。(出版年などろ覚えの場合)

・地域で頑張る元気企業

各都道府県のピックアップ記事を網羅的に探せます。異業種の情報に思わぬ収穫があることも。

・業界動向ウォッチ

各業界に関する記事が「IT・家電」「建設・不動産」などわかりやすく分類されています。

・プロに学ぶ / ・トレンドを知る

各分野のプロフェッショナル・リーダーへの取材記事、トレンド情報が集められています。

これらの最新記事から最近の動向を知り、論文やレポートのテーマとなるようなヒントを探してみるのも一つの方法です。また各項目名や記事中の用語などは自分で検索するとき、「検索ワード」のヒントになります。

・パソコンスキルアップ講座

パソコン講座や関連記事が、「Windows」「Excel」「セキュリティ」といった8つの項目で分けられています。キーワード検索で必要な情報を入手できます。



・特選ボックス

ソフトウェアの解説書など、お薦めの冊子やコンテンツが紹介されています。

図書館インフォメーション

◆特設展示「スキルアップ～マナー編・自己啓発編～」

昨年、好評を頂いた「スキルアップ特集」をテーマに「マナー編」「自己啓発編」と盛りだくさんの展示を行ないます。就活や社会生活にむけての準備に、日頃のちょっとした疑問解決に、是非ご活用ください。



◆企画展示「大学生が主人公の本」

ふとした「共通点」がきっかけで新しい出会いや、つながるきっかけを見つけた、という経験はありませんか？今回、「共通点」を「大学生」として、「大学生」が執筆した本や、「大学生活」がメインに描かれた小説などを集めています。いろんな「つながり」を探してみませんか？



◆卒業生・保護者・地域住民の方も、図書館をご利用になれます

公的機関発行の身分証明書および写真（横3cm×縦4cm）が必要です。なお、外部の方は利用登録料1,000円をご持参下さい。定められた範囲での閲覧・貸出・所蔵資料の複写が可能です。ご希望の方は2F受付まで。

◆平成23年度上半期に寄贈された本学教員著書は下記の通りです。

（教員名の50音順）※配架場所は2F「本学教員著書コーナー」です。貸出もできます。

【飯田耕二郎 先生】『現代のエスニック社会を探る：理論からフィールドへ』学文社，2011.3。【請求記号：334.4/Y44】

【石上 敏 先生】『東大阪今昔写真帖：保存版』郷土出版社，2007.8。【請求記号：216.3/173】

【片野 真佐子 先生】『柏木義円書簡集』行路社，2011.3。【請求記号：198.52/Ka77】

【木村 雅文 先生】『パーソンズと現代社会論』いなほ書房，2011.5。【請求記号：361/Ki39】

【孫 飛舟 先生】『転換期を迎える東アジアの企業経営』御茶の水書房，2011.3。【請求記号：335.22/So41】

【高橋 哲雄 先生（名誉教授）】

『スコットランド歴史を歩く』岩波書店，2004.6。【請求記号：232.2/Ta33】

【谷岡 一郎 先生、岩井 紀子 先生】

『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集』第11集 日本版総合的社会調査共同研究拠点大阪商業大学JGSS研究センター，2011.3。【請求記号：361.91/O73】

【福嶋 裕 先生】『初歩の物理学』東洋書店，1993.12。【請求記号：420/F74】

【山本誠先生、塩塚武康先生、坂手啓介先生、和田伸介先生、矢部孝太郎先生、林幸治先生】

『商業簿記のエッセンス』中央経済社，2011.4。【請求記号：336.91/Y31】

開館案内

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

●は休館日です。

上記以外にも臨時休館日进行を設ける場合があります。

開館日程および時間は変更されることがあります。

詳細は学内掲示・モニター・ホームページ等でお知らせ致します。

大阪商業大学図書館報「ブック村だより」第39号

平成23年11月30日発行

大阪商業大学図書館

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10 電話 (06) 6781-5280 FAX (06) 6781-0089

e-mail: lib@oucow.daishodai.ac.jp ホームページアドレス: <http://www.lib.daishodai.ac.jp>

ISSN 1346-8928